近代日本における「修養」

綱沢満昭

人はいつの時代も、あらゆるものから解放されて生存しているわけではなく、何ものかに強く拘束されて生きている。時代により、社会により。それぞれの枠内で存在を許されていると言ってもいい。人力を超えたところに存在する大自然の拘束もあれば、人工的な規矩、宗教、道徳、教育によるものもある。そして人は、それらの拘束に対して、順応する場合もあれば、徹底抗戦を挑む場合もある。そこには、抑圧の風景もあれば、同化、反逆、解放の風景もある。人工的拘束というものは、社会的、時代的背景のなかで、綿密に作られてゆく。

かつて修養という拘束的人間教育の一形式があった。これが、真の個人の自律を意味するものとなったか(1)、それとも、ある個人への、また国家への忠誠的人間形成のためのものであったかについては、慎重な検討が必要とされるところではあるが、どちらかと言えば、おしきせの倫理、道徳と深く、強く結合し、支配体制の秩序維持、防御のための、巧妙な手段という色が濃いものであったことは、言うまでもない。

かつて、全社会とは言えないが、日本の広い社会領域において、儒教的修養が、日常的規範であり、その社会秩序維持にとっての基本的雰囲気となっていた。

しかし、近代以後になって、この修養が、俄かに、もてはやされる時期が到来したことがある。明治の後半から大正にかけてのことである。日清、日露という戦争の結果、表面的に一応は勝利をおさめた日本は、それまでの国内外の緊張感というものが、やや弛緩したのは事実である。このことが、人間個人の意識の上に、さまざまな影響をおよぼすこととなった。国家に忠誠を誓う人間像は、次第に後退し、個人的日常に重

きを置こうとする風景が多く見られるようになる。日本が「大国」に膨張したという幻想のなかで、個人は一時の安心を手にしたかに見えた。しかし、現実の日常は生活苦に呻吟する民衆の姿があるばかりであった。国家への忠誠も関心も弱く、薄くなり、それに背を向けて歩く人間像が色濃くなってきた。国家からの個人の乖離現象である。このことは国家の側にしてみれば、国民統治上の一大ピンチであった。

この国家への背反、無関心を日常とする民衆の精神は、この時代の象徴的現象となった。それまでの国家への期待も消え、そうかといって自立するだけの力量もなく、煩悶する若者の数は増大し、一つの社会現象となった。明治三十六年五月二十一日の藤村操の華厳の滝での投身自殺は、このことの予見的、象徴的事件であった。安倍能成は、当時の若者の心情を次のように語っている。

「藤村の自殺が我々に与へた衝撃は大きく、未熟の身で人生を『一切か皆無か』につきつめて、自殺に駆られるといふ傾きの我々にあったことは事実である。私は入学の時藤村、藤原と同級で、藤原は特に藤村と親しかった。藤村は紅顔の美少年で死んだのは数へ年十八歳だが、満は十六歳十ヶ月で、岩波より五つ年下であった。当時及びその後私より一級下の魚住影雄が、『校友会雑誌』誌上毎号人生や宗教の問題を痛烈に論じたことは前にも触れたが、魚住は藤村と相知って居り、最も多く藤村の死に動かされた一人である[2]。」

青雲の志を抱き国家有用の人物たらんとしていた若者が、俄然そのような世俗的名誉を恥とするような心境に変質したのである。国家価値の絶対性は希薄化し、個人の関心事は、私的なものに限定、集中されることとなった。

ナショナリズム昂揚期に、日本主義を高唱していたあの高山標午も、明治三十四年には、例の「美的生活を論ず[3]」を発表し、本能に絶対的価値を置き、幸福とは本能の充足であるとした。明治三十五年四月には、この苦しみを親友姉崎嘲風に次のように訴えている。

「予は幾度か思ひき、寧ろ一切の欲求を解放して、其の為すがまゝにあらしめむ、我れに於て其の独を楽しむ、亦可ならずやと。然れども吾が心流石に疚しかりき。畢竟悟らむが為には、吾が情、強きに過ぎ、迷はむが為には、吾が知、明なるに過ぐ。予は是の中間に佇徊して、遂に其の適帰する所を知らざる也。足下

よ、悪夢に魘はれたる夜は眠らざるに等し、予は実に是の十数年の歳月をかかる煩悶の間に過ごし(4)、」

日清戦争を機に、わが国の民衆は、はじめて国民を意識し、国家を意識したと言ってよかろうと思う。さらに、日本国家の軍人として、はじめて異国の地に赴くこととなった。鍬や鎌や網が鉄砲にかわり、民衆は兵士となったのである。大国である清国を破り、次いで露国にも勝利する。しかし、国家は勝利したが、民衆の日常性は多くの犠牲を強いられることとなった。戦勝によって掬い上げたかのように思えた民衆の心情は、次々と国家の網から落ちていった。「成功」ということに異常な憧憬が集まったのも、国家への忠誠によるそれではなく、個人レベルでの利害、なかんずく、金銭的なものへの関心からであった。この「成功」と富の蓄積とが一致したことは、当時の国家政策を破壊するものではなかった。日露戦争の勝利の裏には、巨大な財政的危機が存在し、その戦後経営にとって、民衆の関心とエネルギーが、至富に向かうのは、決してマイナスではなかったからである。

大正五年、徳富蘇峰は、大正青年をいくつかのパターンに分類し(5)、その一つである「成功青年」に関してこうのべている。

「当世に最も繁昌するを、成功青年と云ふ。是れ其の成功したるが為に云はず、唯だ成功を焦るが為に云ふのみ。而して此の青年や実に頼母敷青年也。彼等は自己の運命を開拓すると同時に、帝国の運命を開拓す(6)。」

ここで蘇峰は、一応この「成功青年」の存在を是としてはいるが、しかしそれは、個と国家とが同一方向に向いて、調和がとれている限りのことである。その後、すかさず蘇峰は、余りにも金銭に目がくらんでいる若者に、次のような酷評をあびせている。

「現時の成功熱の流行患者は、必ずしも高遠理想にあるにあらず。偉大の経綸あるにあらず。唯人間万事金の世の中なれば、如何様にしても金持になりたくと云ふ一念に使役せらるゝに過ぎず。惟ふに所謂成功青年の仏果を遂げざる者は、何れも皆な此の餓鬼道に堕落するの、運命を免れざる者にあらざるなき乎。吾人は成功熱の昂揚が、餓鬼道繁昌の基因たらんことを虞るゝ也(7)。」

二つの戦争に勝利をおさめ、それなりの国際的威信を勝ち取った国家が、さらなる発展のために、この経

済的苦境を脱皮し、ナショナリズム昂揚をはかってゆくためには、是が非でも、広汎な国民的エネルギーを必要とした。

国家は国民統治、国民的エネルギーの結集のために、あれこれと対応策をとりはじめたのである。国家は、いま一度、己に関心を持たせ、忠誠とまでいかずとも、民衆が協力してくれる方向での対策に奔走しはじめた。人心の乱れを是正し、軽佻浮華の精神を戒め、社会的混乱を鎮め、勤労、忍耐などの徳目を重視する国民教化政策が、日程にのぼってくる。明治四十一年の「戊申詔書(8)」は、この時期の国家の焦りを象徴するものであった。

明治四十四年三月一日、雑誌「太陽」は、次のような論説を掲載している。

「国民思想又は国民精神の動揺といふ事は、近頃到る処に喧しい。十年前までは、苟にも此の種類の説を口にした者は、直ちに社会から異端視され、世論の迫害の的となって、国民思想の基礎は、さながら盤石の上に据えられたかの観があった。然るに、時勢は、急転直下の勢を以て進行し、国民思想延いては国民道徳の基礎に就て、先づ理論的疑惑を懐く者が現はれ、…（略）…甚しきに至っては、国民道徳の危機を叫ぶ者さへある。一面に於て、国運が隆々として進歩しつゝある事実が認められながら、他面に於て、仮にも此れと相対照して何人も一種奇怪なパラドキシカルな感に打たれざるを得ない(9)。」

国家は飛躍的発展を遂げ、国際的舞台に踊り出そうとしているにもかかわらず、国民の精神は大きく動揺し、衰弱してゆくのは何故かというわけである。

煩悶青年、耽溺青年の激増に対応し、国家は、先の「戊申詔書」に先き立ち、地方に生きる若者に注目しはじめていた。いわゆる官製的青年団形成の前兆であった。明治三十八年九月、内務者が、「地方青年団向上発達ニ関スル件」を、そして同年十二月には文部省が、「青年団ニ関スル件」という通牒を出している。

身体を動かすことなく、煩悶を繰り返す軟弱な学生に対し、地方で農業、山林業、漁業にたずさわる質実剛健な若者の埋もれたエネルギーに注目しはじめたのである。

同じ国に生れながら、一方は世の中で温かく迎えられ、可愛がられ、国家的期待を寄せられてきた若者がいて、他方で、国家からも中央のジャーナリズムの世

界からも無視された若者がいたのである。その後者の若者たちが、俄かに注視されはじめたのである。当時の地方の若者の存在を、青年団の生みの親として知られる山本瀧之助は、次のように評している。

「挙世滔々、青年を以て学生の別号なりとし、青年と云へば一も二もなく直ちに学生を以て之に答ふ、ここに於てか、学生にあらざるものは青年にして青年たること能はず、今や都会僅々数万の学生、独り時を得て鷹揚闊歩し、全国青年の大部百万人の田舎青年は、殆ど自屈自捨塾居縮小せり。…（略）…近来青年の呼声漸く高まれりと雖も、其所謂青年は全く学生に外ならずして、青年論と云た少年論と云ふも、多くは之学生論にあらざるはなく、…[10]」

ここで山本の言う「大部百万人」の若者が、浮上してきたのである。若衆組、若者組と呼ばれた青年集団のなかで、それぞれの特徴を保持しながら、呼吸をしていた若者に、国家有用の人材としての称号が与えられたのである。しかし、有用という意味は、国家の表面的リーダーとしてのものではなく、下から支える力持ちとしてのものであった[11]。いずれにしても、それまで各々の地方を全宇宙として生息していた若い衆が、「広大」な国家の青年にされてゆくのであった。

最初の青年の全国的集まりが開催されたのは、明治四十三年のことであった。『大日本青年団史』（熊谷辰治郎）には、次のように記されている。

「明治四十三年四月二十六日に、名古屋市に於て全国青年大会が開催された。これはおそらく、全国と名のついた青年大会の最初のものであらう。…（略）…その数千九百十四人に達し、そのほか広島県沼隈郡青年会員四百十二名は一列車借切りで乗合するなど、なかなかの盛会であった[12]。」

このような国家主導型の画一化の強要に対して、抵抗する若者集団もないではなかったが[13]、大勢としては官製化の道を余儀なくされた。結局はその方向を除いては、地方の若者の存在意味も喪失してゆくのであった。いまだネーションの自覚は浅く、未知数の活力を豊かに残存していた地方の若者集団が、国家的修養団体に官製化されてゆく風景がここにはあった。国家による国民教化運動の一つの大きな柱として修養的教育が浮上してくるのである。この教育は、地方の若者のみならず、一般的国民教育の中軸に置かれることとなった。人格を陶冶し、品性を高め、忍耐を養い、国

家を支えうる人間を養成することとなる。日露戦争後から大正時代にかけて、修養は、青年教育、社会教育において大きな目標となる。

知に偏することなく、信、情を重んじ、身体をよく動かし、世俗的名誉、富に憧れることなく、人格の陶冶に専念することが、修養教育の指針となる。多くの修養団体が生れ、「修養学者」が登場する。

全国民に向けて、修養運動の精神を高唱した一人に加藤咄堂（本名熊一郎）がいる。彼は明治四十二年、『修養論』（東亜書房）を世に出している。「修養の要義」として、次のように言う。

「修養の要義は己を知るにあり。自己の宇宙に於ける位置、人生に於ける任務を自覚し。此の自覚の根底に立って世に処し道を行ひ。我が生存をして意義あらしむ。これ吾等が修養の指針たり(14)。」

「修養の目的」に関してはこう言う。

「修養の目的は人格を完成し、当世に等して有用の材たらしむるにあり。此の目的を思索するに当ては先づ人格の何たるやを定めざるべからず(15)。」

修養の要義や目的はこうであるが、これは時代によって、その現出の仕方は異るものだと言う。旧い修養は少しずつ移ろいゆくものでなければならない。現時点で必要とされている修養とは何か。彼は次のように言う。

「新時代の新修養は又新意味を以て解せざるを得ず。吾人は僅かに静、以て身を修め、倫、以て徳を養ふのみを以て足れりとせず、進んで動、以て世に等し、勤、以て道を行はしめんとす。此の故に吾人の謂ふ所の修養には静の外に動あり、徐の外に動あり、殊に其の修養する所、人格全般に亘るが故に、唯だ其の目的とする所心田耕耘の一面に存せずして別に身体訓練の一面あり(16)。」

人格の完成、品性の向上、そのための意志の鍛練が修養であるとしても、ポイントは、それが新時代において、ふさわしいものであるか否かにかかっている。誰にとって、何にとってふさわしいものであったかは別として、明治、大正、昭和期のながきにわたって、日本列島を席巻したものに、蓮沼門三の修養団運動がある。

明治三十六年、東京師範学校に入学し、寮に入った蓮沼は、この寮の汚染と不潔さに驚愕し、この環境の清掃、美化に精力を費す。蓮沼の「年譜」にこうある。

「『天下を動かさんとする者はまず動くべし』と泥靴に踏みあらされ、不潔をきわめた寄宿舎の美化を思いたち、起床前単身廊下の雑布がけや便所掃除、運動場の草とりなどをはじめる[17]。」

悲憤慷慨する気持も衰弱し、煩悶を繰り返す空気が充満しているこの環境を憂慮した蓮沼の熱い情念は、明治三十九年二月十一日、仲間と共に修養団を設立する。蓮沼二十四歳の時である。翌四十年には、この師範学校を卒業し、四十一年には、修養団の機関誌「向上」を発刊することとなる。修養団設立の根本的理由を彼はこう語っている。

「つらつら世のありさまを見れば、滔々として我利我欲に趨り、自己のためのみをはかって他人を顧みるの暇なく、人を引き落としても、噛み殺しても、自分の懐に金が入り、おのれの立身ができるならかまうものかと、互ひに毒舌を吐き、毒剣を揮って修羅の巷を現出し、互いに血潮を流しておる。…（略）…あふるる熱誠は、現世の状態を黙視するに忍びず、やまんとしてやむあたわざる憤慨の念は、ついに誠心ある青年の一大団結となり、修養団は組織化されたのである[18]。」

この修養団は、流汗鍛練と同胞相愛を基本に置きながら、白色倫理運動[19]を推進し、国家社会の新たな建設に、貢献可能な人物の養成を主眼とした。修養団は民間の団体とはいうものの、国家の基本的国民教化政策と合致する面も多く、また、現実に政・財界の協力も得て、全国的運動へと拡大していったものである。このことに関して、一部の人たちからは、国家権力に迎合するエセ自発的民間運動で、純粋で正直で真面目な若人のエネルギーを国家へ、また企業へ奉仕させる役割を演じたのが、この修養団運動であるとの酷評もある。そこにあるものは、階級的視点をはじめとする社会的矛盾の認識を抱くこともなく、ただ身体を動かし、汗をかき、堅思持久の精神があるばかりであったとの見方もないではなかった。

しかし、この運動が、全国津々浦々の多くの人々に共感を与え、全国的な社会教育運動にまで拡大していったことは高く評価されてよかろう。昭和六十年に、創立八十周年を迎え、修養団は「八十年史」を刊行することになったが、その時の理事長、有田一壽は、「刊行の辞」で次のようにのべている。

「修養団が蓮沼門三を中心とする青年学徒によって

創立されたのは、明治三十九年二月のことである。爾来、明治、大正、昭和の三代、八十年の永きにわたり、愛と汗とを標榜して、明るい社会建設運動を展開し、今日に至っている。…（略）…修養団の運動は、わが国の主として社会教育の分野において、幾多の新機軸、新生面を切り開き、識者により、日本における社会教育の源流として高く評価されているところでもある[20]。」

ところで、この修養団運動が、一部の人からの批判を受けながらも、なにゆえに力を持ち、あれだけの多数者を引きつけ、全国的運動にまで発展しえたのであろうか。この秘密の解明は、社会運動、政治運動考察の場合、欠かしてはならないものとなるのではなかろうか。

渋沢栄一、森村市左衛門、井上哲次郎、新渡戸稲造、河野広中など、政財界の人たちに支持、協力をえたということ、また、時の国策に治ったものであったことを考慮しても、それだけでこの運動の成功の理由が完全に解明されたことにはならないであろう。

一つの師範学校という小さな世界に芽生えたこの運動が、日本列島全体に拡大し、蓮沼の精神が浸透していったのは、それを受け入れ、積極的に協力してゆく民衆の精神構造そのもののなかにこそ、それを解明する鍵があると言えよう。

流汗鍛練、同胞相愛、総親和総努力による白色倫理運動は、企業経営、工場経営の上からも歓迎され、労資の階級対立をも超えた人間愛あふれる世界構築ということで、もてはやされることとなる。それぞれの領域で、各自が個人として修養を積んでゆくことが、いずれは国家社会に寄与することになるとあって、若者の心は躍動した。強制労働ではなく、積極的、自主的労働への意欲は、企業側にとっても、願ってもないことである。修養団運動の拡大状況を、『修養団運動八十年史・概史』は次のように語っている。

「団運動がいかに領域へ浸透していったか、ということの一端を記してみる。東洋紡姫路工場の団員は三千名に達し（昭和三年十二月）、八幡製鉄連合会の団員数は五千人を突破している（昭和六年二月）。秩父セメント秩父工場では全従業員二百六十名が終身団員となり（昭和八年三月）、大阪住友製鋼所では終身団員五百二十二名に達した（昭和八年末）[21]。」

欲望を無制限に発散することによってではなく、修

養という、いわば禁欲的倫理の実践こそが、資本主義の精神につながるという風景をここに見ることが出来る。労資の対立を単に回避するという消極的意味だけが、そこにあったのではない。「日東紡績株式会社」の片倉三平は、修養団と工場の関連について、次のように述懐している。

「創立当初から精神修養の一環として取り上げた修養団運動は、当社の訓育、社風の形成に裨益するところ大なるものがあり、とりわけ、昭和三年八月の信州木崎湖畔の第三十五回修養団講習会受講が発端となり、蓮沼先生をはじめとする諸先生方の熱意溢れるご指導、ご薫陶を受け、愛と汗の運動は、燎原の火のごとく日東紡各工場に拡がっていったのである[22]。」

従業員の労働意欲、向上心に基づく生産性向上は、経営者にとっても、この上ない喜びであったが、働く側にとっても、このことによって、己の存在理由が確認出来、自主独立の精神で各々貢献可能とあれば、なにも急進的労働組合運動への道を選択する必要はなく、惜しみなく己のエネルギーを放出し、かつて経験したこともなかった「国民」としての自覚と喜びに酔うことが出来たのである[23]。

工場のみならず、地方農村に生きる人たちの心情にも、修養団の精神は強く深く浸透していった。次のようにのべる人もいる。

「農村社会の沈滞、衰退が問題化し、農村社会解体の危機感がいだかれるなか、そこで生きる個々人も、大きな不安にさいなまれながら、自分たちの生きる道を模索していた。そうした状況のなかでは、個人の道徳的向上が即、社会を向上させる、改良することになるという修養団の論理は、きわめて魅力的なものであったに違いない[24]。」

近代主義的知識人からは、非科学的、非論理的などと嘲笑されたこの修養団運動も、国家から無視され、放擲されている人間にとっては、己の生き甲斐を感じ、己の存在を公的に示し得る千載一遇の好機であったかもしれない。

もちろん、そのためには、本来持ち合わせている若者の野性味は駆逐され、毒気は消され、角は抜かれ、忠良なる国民として生きることを余儀なくされてゆくことを覚悟しなければならなかった。この現実から目をそらしてはならない。そらしてはならぬが、それでは、それに代り得る、あるいはそれを凌駕するだけの

道が、彼らの行く手にあったのか。

村落共同体内部で生き死にしていた若者が、国家的使命、役割を担うことになったのである。修養団運動は、この国家と若者を繋ぐ、極めて優良な媒体となっていたのである。村落共同体で通用していたルール、モラル、愛を破壊することなく、修正して継承してゆくテクニックを修養団は持っていた。旧習に基づいての新鮮な実践が、修養団運動の基本にあったということが出来よう。

例えば、大正四年八月に実施された福島県那麻郡桧原湖畔での第一回天幕講習会にそのことはよく現われている。修養団史上はいうまでもなく、この講習会は、日本の社会教育史上でも極めて重要な意味を持つものであった。

全国から選抜された青年が、蓮沼精神の徹底化をはかり、国家の細胞となるべき村落共同体の自治を浄化しつつ、団結を強めてゆくことを目的とした。講師には、蓮沼のほか、田沢義鋪、小尾晴敏、山下信義、有馬頼寧、松崎蔵之助らの錚々たるメンバーがあてられた。具体的内容は次のようなものであった。

「天幕は十六建てられ、全国から集まった七十五名の講習生と八名の聴講生は十の天幕に分かれて入り、それぞれ家に擬し、十の家の名は、公共、勤倹、協同、貫行、自彊、醇厚、弘毅、感謝、分担、和楽であった。そして三つないし四つの家で組を作り、三つの組で向上村となした。その他の天幕は、向上村の役場、学校、病院、郵便局、産業組合、来賓用にあて、湖畔に一つの自治体が出現した[25]。」

国家の細胞となる理想の自治体実現が目標であるが、そのためには具体的、日常的仕事による団結、親睦を旨とすることになる。その場合、自由はある枠内におけるものであった。いわば、枠の実現でもあった。これがあたかも若者の自主的、内発的なものであるかのように見えるところに、この講習のねらいはあった。

若者の初々しいエネルギーを吸収し、同胞主義、総親和主義でもって、天皇制国家完成、強化の枠に組み入れてゆく巧妙なものが、そこには隠されていた。それでも、この修養団運動が、多くの民衆の関心をひき、大きな運動として展開してゆくという事実を、けっして冷笑してはならない。

こういった修養主義、修養運動とは別に、和辻哲郎、阿部次郎、安部能成らを中心とした西欧思想の輸入による教養主義、教養派と呼ばれる知的運動の潮流があったことは周知の通りである。この教養主義とか教養派というものは、修養主義などと較べる時、極めて新鮮な響きを持ったものである。堅苦しい規範や形式、枠などに拘束されることなく、自由、進歩を重んじ、新しい時代を開拓するための知的潮流であるとの印象を強く与えたのである。

大正教養主義という一つの知的運動が、日本近代の知を代表するかのように、言論界を席巻し、当時の知識人、学生などの間で流行したことがある。たしかに、この大正教養主義の果した役割は多くありはするが、ここでは、その良面よりも、運動としての「力」のなさを説いてみることにしたい。

政治的、国家的なるもの、また、俗世間的なるものへの発言を極力控え、個人の人生を優先させ、古典への密着を通じて、思索に耽ることをもって、教養主義の特徴とする。教養派と呼ばれる人たちにとって真理の探求とは、外部の世界を見ぬことであり、古典を師として、それに没頭することであった。

大正三年に第一高等学校に入学した三木清はこう語っている。

「大正時代における教養思想は明治時代における啓蒙思想――福沢諭吉などによって代表されてゐる――に対する反動として起ったものである。…（略）…私はその教養思想が抬頭してきた時代に高等学校を経過したのであるが、それは非政治的で現実の問題に対して関心をもたなかっただけ、それだけ多く古典といふものを重んじるといふ長所をもってゐた[26]。」

自ら現実世界の侵入を峻拒しただけではなく、現実世界で汗と血を流しながらの日常を余儀なくされている多くの人たちの世界があることを、彼らは結果的には無視してしまった。

現実の民族や国家、社会から離脱したところで、古典をどれほど読み、知識をどれほど増やし、観念世界で、どれほど遊戯的苦悩をしたかが、彼らのプライドにつながるものであった。

明治の末期から大正にかけての時代は、いうまでもなく、国内外ともに激しく揺れ動いた時代であった。

明治四十年の足尾、別子銅山の暴動、明治四十三年の大逆事件、韓国併合、大正三年のシーメンス事件、第一次世界大戦、大正七年の米騒動、シベリア出兵、大正八年の普選運動、大正十二年の関東大震災などなど。

こういう時代であればあるほど、教養派の人たちは、そういった現実と己の間に、幾重もの厚い壁を用意し、「良質?」の思索に耽ったのである。

唐木順三が、教養派の性格を次のように特徴づけたことがある。

「教養派は内面的生活、内生に閉ぢこもる。それは二重の意味に於て外面的なもの、外面生活を主問題にしない。一つは我々の身体的、或は行住座臥的な型、かつて修養がその規範とした形式を問題にしない。…(略)…その二つには社会的政治的な外面生活を問題にしない。…(略)…問題は個性と普遍、自我と神にある。さうしてその中心問題の究明は、今日の如き師弟関係の稀薄な、人と人との間に信用のない時代にあっては古人の書物に頼るより外にないといふのである[7]。」

日本人の生活規範の伝統とも言うべき秩序や形式などに、いささかも価値を見出すことなく、また、己を囲繞する政治、経済にも何の関心も示さず、ただひたすら、古典に依拠しつつ、内面的思索に没入することを唯一の生甲斐とするというのである。

先述した修養団の天幕講習会が開催された大正四年に、阿部次郎の『三太郎日記』(第二)が岩波書店より刊行されているが、この『三太郎日記』に教養派の特徴がよくあらわれている。啓蒙合理主義や実用主義、効率主義などといった国家、社会に役立たねばならぬという気分を排するところに教養主義、教養派が位置することになるのは明らかである。

浅慮な実学や実利主義の帰結するところが、どれほど危険なことであるかを私たちは知らねばならない。いつの間にか近、現代人は、生産活動を唯一の人の道として受容し、それに役立つことをもって、最高の生甲斐としているところがある。しかも、それが国家のため、全体のためというところへ収斂してゆくことによって、さらなる価値が重ねられてゆくというシステムが構築されている。

それだからこそ、日常から遠く離れ、高所より時の政治状況を鳥瞰し、役に立たないということが、決定

的に重要な役割を果すことがある。しかし、そこには強烈な現実への関心と対応の欲求が濃厚に存在することが前提となることも忘れてはならない。はなから、いかなる欲求も関心もなく、それが常態となる時、この姿勢は単なる空虚な遊戯となり、エセ客観主義を生み、遂には、体制内存在のために極めて重要な役割を果すこととなる。

実践、実行に敬意を表しつつも、その空虚さについて『三太郎の日記』は、次のように語っている。

「ある人は考察の生活、観照の生活、瞑想の生活――約言すれば思想の生活の空しさを説いて、事業と実行の生活につくべきことを奨説する。しかし、確乎たる思想上の根底を有せざる実行の生活もまた空しい。…（略）…ただ動くがために動く生活のあわただしさを思え。…（略）…実行のために実行を追うものは、ただ無数の事件を経験するのみで、真正に『我』を経験する機会を持たない[28]。」

行動、実行の生活とは離れたところで呼吸をしたがる教養派であるが、しかし、その軽く見てきた集団やその人たちが形成してきた力強い圧力に対し、一矢も報いることもなかった事実をどう弁明するのであろうか。血の団結だとか結束だとかを教養派は嗤う。民族や国家よりも、普遍的人間に価値を置く。日本とか、日本人といったものに執着し、民族の道を濃く出しすぎると、人間が人間として持っている人類的普遍的価値を過小評価し、また欠落さす危険性があるというのである。民族ではなく、それを超えたところに人間としての教養の問題があるとして、『三太郎の日記』は次のように説く。

「民族的教養は我らにとって唯一の教養ではない。およそ我らにとって教養を求むる努力の根本的衝動となるものは普遍的内容を獲得せんとする憧憬である。個体的存在の局限を脱して全体の生命に参加せんとする欲求である。ゆえに我らは民族という半普遍的なものの生命に参加することによってこの渇望をみたすことはできない[29]。」

国粋主義や民族至上主義が横行する時、この人間としての普遍的価値追求の理念は、極めて重要な思想的武器となることはいうまでもない。

一国の、また一民族の自律性、独立性を問い、それを追求することに、すべての瑕疵があるということではなく、それは一面的であり、普遍的価値そのもの

ではないと、『三太郎の日記』はこのように言う。

「我らが教養を求むるは『日本人』という特殊の資格においてするのではなくて、『人』という普遍的の資格においてするのである。日本人としての教養は『人』としての教養の一片にすぎない。民族的教養が唯一の教養でありえないことは、教養の本質より見て自明の道理である。ゆえに我らが教養の材料を求むるとき、その材料の価値を定むる標準は、それらが我らの祖先によって作られたものであるかないかの点にあるのではなくて、それが神的宇宙生命に浸透することの深さに依従するのである[30]。」

ナショナリズム昂揚期、激昂期における、あの民族的神話による人間改造の恐怖を忘れてはならない。民族の固有性を語る時、その前提として常にクールなブレーキのきく装置が市民レベルにおいて用意されていなければならないであろう。

「普遍的妥当性に対する純真なる憧憬を欠くとき、あらゆる教養は、あらゆる学術はその根底を喪失する。かくのごとき教養は民族と民族との間の憎悪を増進する『戦争』の道具となるにすぎないであろう[31]。」

『三太郎の日記』にあるこの文章は、訂正を必要としないほど完璧なもののようである。しかし、憎悪の対象としてしか見てこなかった民族や、天皇制への恋々とした情念が、現実世界における多くの民衆の心情であったことをも同時に忘れてはなるまい。

抽象的人類史や普遍的人間像が、具体的日本の歴史と心情を凌駕することがどれほど困難なことであるか、私たちは苦い過去の歴史から多く学んできたはずである。世界平和や人類愛の尊厳を認めぬ者はいないが、ギリギリのところで、己が日本人であり、日本の歴史を皆負いつつ生存してきたという歴然とした事実も明確に自覚せざるを得ない。それぞれの国家、民族が、宗教、政治を異にしつつ、それぞれ独自の歴史を紡いできたのである。この事実への自覚のなさ、軽視が、共産主戦運動家の転向の原因になったことはいうまでもなかろう。

世界平和も人類愛も、「万国の労働者団結せよ」も、それはそれとして素晴しい。コミンテルンの「テーゼ」も、それなりに立派である。しかし、現実に、確実に存在する一国の歴史と切り離して個人の存在があるわけではないのである。究極的に、絶体絶命のなかで個人が選択し得るものが、例外はあるとしても、家

族的情愛であり、長期にわたるその国の、その民族の伝統、習慣ではないか。それを無視した階級闘争、平和運動が、いかに貧困で、やせ細ったものでしかないかは証明済である。昭和八年の、あの佐野学、鍋山貞親の獄中転向「共同被告同志に告ぐ」にも、そのことはよく表現されている。転向者の一人、小林杜人も、獄中生活を体験し、次のような声をあげている。文中に小野とあるのは、小林のことである。

「小野はヨーロッパ人にもなり得ない。即ち暝々の裡に、この三千年の歴史を持った日本民族の血が、小野の血管に躍動して居るのだ。そこで先づ第一に日本人たることを肯定せざるを得なかった[32]。」

「仮りにソビエット・ロシアと日本が戦争するとして、小野は日本共産党の政策の一スローガンたる『ソビエット・ロシアを守れ』と云って居ることが出来るだろうか。自分にはそれは出来ない。それのみか、そうした場合は、小野は自国のために死を捧ぐることこそ欲するであらう[33]。」

日本人としての己を投げ捨てても、闘って勝ち取るに値する普遍的価値が、この世にないとは言えない。排他的、利己的ナショナリズムの危険性は常に気にかけていなければならない。しかし、抽象的人類の永久平和のためという運動の最中に、次々と斃れてゆく家族や仲間の姿を眼の当にする時、己の体内を流れる血は、いかなる声をあげるのか。人間個人の存在は、いきなり無媒介に人類や宇宙につながるわけではあるまい。

民族にも囚われず、日常的政治、経済からも逃れ、内面的世界にのみ閉じこもって、古典を読み、古典を師として仰ぎ、思索を続けるという行為は、狭隘で独善的な立場からの脱却、解放を意味し、人類が創造してきた数々の文化を極めて自由に評価するという精神につながるように見えはするが、そうではなかろう。そこに生れるものは、無責任な相対主義と、不徹底なニヒリズムであろう。

もちろん、教養主義、教養派が果たした役割を全面否定するなどといった大それた独断が許されていいはずはない。岩波文化と言われるものの創造者たちの貢献は、亀井勝一郎の次の言辞に集約されている。

「西洋文化の根源をなす様々の古典、各国一流の著作を紹介し、或はそれを基礎とした着実な学究を登場

せしめた。同時に、東洋及び日本の古典伝統をふりかえり、これを西欧的知性の照明のもとに再検討しようとした。この二つを私は意義ある企図としたい[34]。」

教養人は、物識り、博識でなければならなかった。同時に教養人の読書の幅には驚嘆するものがある。時代を超え、地域を超え、ジャンルを超えて彼らは古典を師として学んだのである。しかし、その行為が現実的人間の存在に測鉛を降すことはなく、ただ浮遊していたにすぎないという酷評も是とせざるを得ない。これでは、信仰にもちかい絶対的形式、拘束に基づいたところから生れてくる決断、行動に、かなうはずはない。「型」と軍隊について唐木順三はこう言う。

「彼等（＝軍）は機械的に天皇を絶対化した。国家を絶対化した。統帥部を絶対化した。…（略）…軍の絶対化の前に政治も文学も萎縮したまま追随した。何故にこういふことが簡単に行はれえたか。軍が型をもっていたからである。或はむしろ型そのものであったからである[35]。」

迷うことなく、一つの方向へ自信（？）を持って突き進んでゆける、このしきたりをもったものに対して、教養がいかに弱く、はじめから勝ち目のないことを、唐木はさらに次のように言うのである。

「教養が自己を絶対化した存在に対して如何に無力であったことか。或は絶対化した存在に如何にさらわれていったことか。そして人間が、殊に日本人が型に対して如何に弱く、更にはまた型に憧憬することか。…（略）…教養とは所詮型に抗しえないものである。また抗しえないやうな教養が日本の教養であった[36]。」

枠、しきたり、形式に依拠する行的実践が近代的知に対していかに強力なものであるかは、いまも私たちは日常的に経験していることでもある。カントもヘーゲルも、ニーチェもキエルケゴールも理解している己が、何故その行的実践に敗北を喫するのかと涙を流して悔しがる「知識人」はあとを絶たない。

この教養主義、教養派的なるものと、蓮沼の修養を較べる時、その違いは歴然としてくる。蓮沼は常に行動実践、行動を優先させる。神道であれ、キリスト教であれ、仏教であれ、それらは彼の心中で一つのしきりたりの基盤に溶け込んでいる。平和憲法より一片のパンを選択する極限状況下に置かれた人間の苦悩を救済するものは何か。また、その時その人間の魂を突き

動かすものは何か。蓮沼は己の肉体と精神を極限まで責め抜くことによって、そのことを体感している。実践、行動を伴わない教養を彼は信用しない。明治四十年の蓮沼の言はこうである。

「吾人は徹頭徹尾、実行主義である。高尚な理論を語るよりも卑近な道理に満足して、意味ある其生活を営めばよいのである。…（略）…吾人は学者でないから深遠な倫理説を説き、そして人を理屈づめにすることはできぬ。…（略）…ただ実行方面において成功しようと思うのである[37]。」

この主張、主義は蓮沼の人格の基底の部分に存在したもので、生涯変ることはなかった。肉体化しない思想、教養の虚を突いて、どれほど多くの暴力が横行したことか。

地中深く堀り下げ、水脈を探り当て、それを吸引して構築していった理論や思想を、日本の近代は、例外的にしか創造し得なかった。日常のなかで呻吟する民衆の肉声、情念を吸みあげるどころか、それを非合理的、非論理的だとして軽蔑し、無視し、放擲していった、あきれた近代思想があるばかりであった。水脈や鉱脈に眼をつけ、それを堀り当て、利用していったのは、むしろ国家権力の側であり、それを支援する学問であった。また、その国家権力との結合という危険性をはらみながらの、蓮沼らの修養運動であった。

疑心を喪失し、歪んだ現実を己の忍耐と努力で乗り切ろうとする極端な真面目人間を、国家はいつの時代も、待ち望んでいる。なかんずく、国民統治機能に危機と病理が生じた時、その欲求は頂点に達する。貧困と矛盾の錯綜する村落共同体は、山紫水明の桃源境にすりかえられ、青年の野性味と本能的爆発力は愛撫と暴力でもって骨抜きにされてゆく。

蓮沼の次のような発言を、国家は喉から手の出るほど欲しがるものである。

「私情私心を去り、国本確立のために、身命を捧ぐべき時機は到来したのであります。われわれは、その善化網心となり、せめて自分の網域だけでも分担して、わが住む里を総親和総努力の明るい里として、かくして国家進運に貢献しなければならぬのです[38]。」

宙吊り状態になった精神からは、断じて動かずとか、是が非でも決行するといった力強い行動、実践は生れない。原子化された個人は、その不安解消のために、それが疑似とわかっていても、共同体という罠に

身を寄せようとする。血や土の神を唄いつつ、神話という酒で、国家は人を酔わせる特技を持っている。相対的「知」による供宴が何万回開催されようと、それは、しきたりや拘束を持ったものに対抗しきれぬという歴史を私たちは持っている。どれほど陳腐で、浅慮で、非合理的であったとしても、人を究極的なところで動かすものは、神話的なるものであるという絶望的自覚が、とりあえず必要となってくる。

蓮沼を中心とした修養主義、修養団運動は、その出自は別としても、皇国民養成のための社会教育運動であったことは否定出来ない。階級対立、土地制度の矛盾などを隠蔽し、総親和、同胞相愛主義などといった旗を掲げながら、国家体制への協力を惜しむことはなかった。

しかし、そういう主義、運動が、燎原の火のごとく、全国に拡大していった事実を無視してはならないし、行動、実践を嗤いながら、なに一つその勢力に抗することも出来ず、安全地帯で、哲学を語っていた教養派、教養主義を忘れてもなるまい。

注

(1) 次のような見解がある。「近代日本人の人間形成における基本的枠組みとなった《修養》思想は、日本人個々の《自己支配》の自律的願望にもとづいて形成されたものであった。…〈略〉…むしろ、《自己支配》の自律的願望に支えられた《修養》思想は、本性上、国家権力による強制をも含めて他律を排しようという姿勢のもとに形成されたものであった。」（宮川透『日本精神史の課題』紀伊國屋書店、昭和五十五年、一二九頁。）

(2) 安倍能成『岩波茂雄伝』岩波書店、昭和三十二年、六二～六三頁。

(3) 明治三十四年四月、雑誌「太陽」に掲載。一節にこうある。「何の目的ありて是の世に産出せられたるかは、吾人の知る所に非ず。然れども生れたる後の吾人の目的は、言ふまでもなく幸福なるにあり。幸福とは何ぞや、吾人の信ずる所を以て見れば、本能の満足、即ち是れのみ。本能とは何ぞや、人性本然の要求是れ也。人性本然の要求を満足せしむるもの、茲に是を美的生活と云ふ。」（『標牛全集』第四巻、日本図書センター、平成六年、七六六～七六七頁）。

(4) 『標牛全集』第二巻、日本図書センター、平成六年、七二五頁。

(5) 「大正青年と帝国の前途」（神島二郎編『徳富蘇峰集』〈近代日本思想大系(8)〉筑摩書房、昭和五十三年、七一～七九頁）のなかで、次のような青年の姿をあげている。「模範青年」、「成功青年」、「煩悶青年」、「耽溺青年」、「無色青年」。

(6) 同上書、七二頁。

(7) 同上書、七四頁。

(8) 橋川文三はこの「戊申詔書」についてこうのべている。「明治

末期の日本には、一種病理的な機能不全を思わせるような様相が広汎にあらわれていた。それらの事例を一つ一つとりあげてみるまでもなく、明治四十一年十月十三日、天皇の名によって発布された『戊申詔書』そのものが、そうした社会的病理の蔓延に対する警告以外のものではなかった。」（『昭和維新試論』朝日新聞社、昭和五十九年、一〇二頁）。

(9) 金子筑水「国民思想の動揺」『太陽』第十七巻四号、博文館、明治四十四年三月、一四頁。

(10) 「田舎青年」『山本瀧之助全集』山本瀧之助功労顕頌会、昭和六年、一頁。

(11) 鹿野政直もこの点に触れて次のようにのべている。「青年を教育する熱意にもかかわらず、かれらをばあくまでも非エリート層として固着させようとする意識であった。…（略）…エリートと大衆の深淵は、このときぬきがたいものとなった。青年団運動における人間形成が、なによりも被治者的精神の養成を目途としたのは、そういう理由によるものであった。」（「戦後経営と農村教育――日露戦争後の青年団運動について」『思想』岩波書店、昭和四十二年十一月、四五頁。

(12) 熊谷辰治郎『大日本青年団史』、一〇三頁。なお、この大会で協議されたものの一つに「青年団規十二則」があるが、それは次のような ものであった。「一、教育勅語並に戊申詔書の御趣旨を奉体すべきこと　一、忠君愛国の精神を養ふべきこと　一、国体を重んじ祖先を尊ふべきこと　一、克く父母に事へ一家の和合を図り身を修め家を興すこと　一、常に自治団体の一員たるを忘るゝことなく先輩を敬ひ隣保を愛し郷里の為に力を尽すべきこと　一、業を励み産を治め国力の増進を心懸くべきこと　一、職業に必要なる知識技能を補習して世の進歩に後れざらんことに心懸くべきこと　一、心身を鍛練し勤労を愛するの習慣を養ふべきこと　一、互に善行を励み風紀を正しうし善良なる郷風を作ることに心懸くべきこと　一、質素にして分度を守り進んで公益を広め慈善を行ふべきこと　一、一致協力の習慣を作り公共の為め有益なる事業を起さんことに心懸くべきこと　一、公衆衛生を重んじ各自の健康を保たんことに注意すべきこと」（同上書、一〇五頁）。

(13) 長野県下伊那郡の青年会などはその一例である。『下伊那郡青年運動史』（国土社、昭和三十五年、参照）。

(14) 加藤咄堂『修養論』東亜書房、明治四十二年、自序。

(15) 同上書、一三頁。

(16) 同上書、三頁。

(17) 『蓮沼門三全集』第十二巻、修養団、昭和四十七年。

(18) 『蓮沼門三全集』第十巻、修養団、昭和四十四年、一〇四～一〇五頁。

(19) 蓮沼はこの運動を次のように説明している。「本団運動の倫理概念。太陽の光が七色融合して白色となるように、人間社会においても、それぞれの持ち味や個性を否定するのではなく、むしろそれらを組み合わせ、総親和、総努力によって人類の総幸福を実現させようというもの。本団運動の別称としてもちいられる語。」（『蓮沼門三全集』第五巻、修養団、昭和四十四年、一六〇頁）。

(20) 『修養団運動八十年史・概史』修養団、昭和六十年、二頁。

(21) 同上書、一一五頁。

(22)『蓮沼門三全集』第一巻修養団、昭和四十六年の「月報」、修養団、昭和四十六年、三頁。

(23)いうまでもなく、労働組合と修養団との間に、次のような対立がないわけではなかった。「職域に団員の数が増え、その運動が活発になっていくと、労働組合の過激派の幹部の目には、団運動はたいへん邪魔な存在として映ってくる。とくに団運動が広がると、ストライキがやりにくい状況が起ってくるので、ストライキをもくらむ指導者は団を敵視するようになる。」(『修養団運動八十年史・精神と事業』修養団、昭和六十年、一五〇頁)。

(24)岡田洋司『農村青年＝稲垣稔――大正デモクラシーと〈上〉の思想』不二出版、昭和六十年、八七頁。

(25)『修養団運動八十年史・概史』修養団、昭和六十一年、八〇頁。

(26)住谷一彦編集・解説『三木清集』〈近代日本思想大系(27)〉筑摩書房、昭和五十年、一三～一四頁。

(27)『新版・現代史への試み』筑摩書房、昭和三十八年、四五頁。

(28)『合本・三太郎の日記』角川書店、昭和四十三年、一四二～一四三頁。

(29)同上書、三五二頁。

(30)同上書、三五二～三五三頁。

(31)同上書、三五四頁。

(32)『共産党を脱する迄』大道社、昭和七年、一六三頁。

(33)同上書、一六五頁。

(34)「現代人の研究」『亀井勝一郎全集』第十五巻、講談社、昭和四十六年、二六五頁。

(35)唐木、前掲書、七一頁。

(36)同上書、七三～七四頁。

(37)『蓮沼門三全集』第十巻、一一三～一一四頁。

(38)『蓮沼門三全集』第二巻、修養団、昭和四十四年、四七頁。

主要参考・引用文献(蓮沼門三の著作は省略)

中島力造編『修養講話』目黒書店、明治四十一年。
加藤咄堂『修養論』東亜書房、明治四十二年。
小野陽一『共産党を脱する迄』大道社、昭和七年。
熊谷辰治郎『大日本青年団史』細川活発所、昭和十七年。
安倍能成『岩波茂雄伝』岩波書店、昭和三十二年。
長野県下伊那郡青年団史編纂委員会『下伊那青年運動史』国土社、昭和三十五年。
唐木順三『新版・現代史への試み』筑摩書房、昭和三十八年。
武田清子『天皇制思想と教育』明治図書出版、昭和三十九年。
鹿野政直「戦後経営と農村教育――日露戦争後の青年運動について」『思想』岩波書店、昭和四十二年十一月。
阿部次郎『三太郎の日記』角川書店、昭和四十三年。
『亀井勝一郎全集』第十五巻、講談社、昭和四十六年。
松村憲一「近代日本の教化政策と『修養』概念――蓮沼門三の『修養団』活動――」(『社会科学討究』第十九巻第一号、昭和四十八年十二月。
住谷一彦編集・解説『三木清』〈近代日本思想大系(27)〉筑摩書房、昭和五十年。
修養団創立七十年記念大会実行委員会編『蓮沼門之論』修養団、昭和五十年。

饗庭孝男『近代の解体』河出書房新社、昭和五十一年。
神島二郎編『徳富蘇峰集』〈近代日本思想大系(8)〉筑摩書房、昭和五十三年。
宮川透『日本精神史の課題』紀伊國屋書店、昭和五十五年。
岡田洋司「農村社会運動としての修養団運動の論理と実態――大正後期の愛知県碧海郡の事例――」(『地方史研究』昭和五十六年八月。)
橋川文三『昭和維新試論』朝日新聞社、昭和五十九年。
岡田洋司『農村青年＝稲垣稔――大正デモクラシーと〈士〉の思想』不二出版、昭和六十年。
『修養団八十年史・精神と事業』修養団、昭和六十年。
『修養団八十年史・概史』修養団、昭和六十年。
『修養団八十年史・資料篇』修養団、昭和六十年。
『標牛全集』第二巻、日本図書センター、平成六年。
筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、平成七年。
宮坂広作『旧制高校史の研究――一高自治の成立と展開』信山社、平成十三年。